

“熊山遺跡の出逢いと研究”

日本先史古代研究会 会員 若狭哲六(当会会長)

私が熊山遺跡と出逢ったのは、鎌倉時代の武将「児島高德公」と三備地方に日蓮宗を布教した「大覺大僧正」は同一人物であったという小著を読んだことから、1984年4月熊山に登ったのが、熊山遺跡を知るきっかけでした。遺跡についての認識は全くない私にとっては、遺跡は、ただただ神秘的な容姿を備えていることに強く心を引かれていたのです。

ちょうどその頃、岡山県では、瀬戸大橋完成を機に「岡山の良さ」を全国に広めようとする企画がなされ、(1)観光資源の発掘整備・(2)観光客受入体制の整備・(3)観光宣伝を三本柱とする観光キャンペーン「あじわいの岡山路」を昭和58年から実施していたのです。実施期間は、瀬戸大橋完成時(昭和63年4月)に向けて毎年継続することでした。岡山県政が、活気的な行政推進を図るため県民に公募した提案制度も、実は「岡山の良さ」を全国に宣伝する要素でもあった。

1984年(昭和59年)私(若狭)は、この機会に熊山についての提案をした。提案の内容は「熊山を再開発」していただきたいでした。その後、知事より一枚の書簡(回答文)が届いたのです。書簡の内容は、山頂の遺跡が指定史跡であるため、その周辺部の大規模な観光開発については、文化財保護との絡み、道路整備の問題、それらと関連する自然保護環境保全等の問題があり、慎重な検討を要するとのことでした。

観光開発の実現は容易でない。しかし乍ら「熊山」を広く世の人々に知って頂く手段としては、「熊山の歴史」そのものの堀おこしが肝要と考えるに及び、以来「耳」・「目」・「足」とでの熊山の歴史、遺跡の探求に突っ込んでいったのです。私の「心のふるさと」であり、偉大な「熊山」・国の指定「熊山遺跡」は、その実「謎の熊山遺跡」というベールに覆われて何等解明されることなく埋もれようとしていたこともようやく分ってきた。

私の「熊山回春」への心は燃えた。

1985年(昭和60年)には「謎の遺跡」から取り出されていた多様な「遺物」を秘蔵していた地元の古老とも出逢うことができた。多くの遺物は、市井の人には全く知らされることなくおよそ半世紀にわたり、他に散逸されることなく地元に残されていたのです。熊山遺跡は、昭和13年6月、地元の人によって発掘されていた。

その後、当時の一市三町(備前市・熊山町・和気町・瀬戸町)の文化財保護委員会に声をかけ、「熊山語る会」の結成に向かった。しかし、残念なことに、誰一人として快く語る会結成には協力を得られず、有志の者同士での語る会となった。

熊山遺跡からは、発掘によって写真(A)が取り出されていたことが、昭和24年11月に地元の歴史研究家によって、京大の梅原末治博士に知らされたのである。

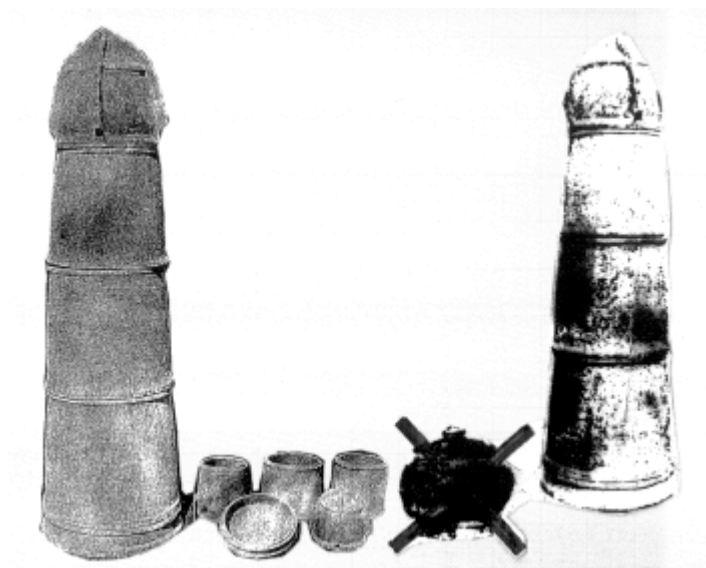


写真 A

写真 B

写真(A)には最初は小壺が入っていないが、写真(B)には三彩小壺入っている。写真(B)は明らかに地元の有志によって

合成された写真であることも、後に地元の人によって証言されている。識者の間ではこの合成写真を以って熊山遺跡を論証しているようである。

梅原末治博士は、昭和 28 年 11 月発行の「吉備考古」=第 86 号で、写真(A)の論証を述べておられる。

写真(B)は、遺跡発掘より 12 年後に地元の人によってつくられていたものです。熊山遺跡は、梅原末治博士の考証により、『石塔』としての要素を指摘されている。

私はその後、町田章氏にお逢いする機会を得、熊山遺跡より取り出されていた遺物の写真を見ていただくことが出来た。しかし乍ら町田氏は、このようなものが遺跡から出るはずもないし、同時に遺跡は奈良時代若しくは奈良時代までいたらないとの所見をいただいたのである。

若狭(私家説)は、若し遺物が、そうでないということならば、いまだだれも手がけていなかった熊山遺跡構築による遺跡形態の分析に取り組んだのである。熊山遺跡形態の解説は、昭和 63 年 4 月 15 日の、「先史日本の夜明け・熊山と東西交流史」に自説を載せているので目をとおしていただきたいと思います。(岡山県立図書館にある)

近江昌司氏は、「備前熊山仏教遺跡考」・『天理大学報』で、(筒形陶製容器が、果たして熊山遺跡より取り出されていたか否かについては、ある種の疑問を持っているとの指摘もされている。) = 補記しておきたいと思う。



会活動 余録



当会の木村玉舟(陶芸家)氏のお父様たち「焼物にかけた情熱—伊部の三奇人」展が備前市日生町の加子浦歴史文化館で開催中の情報を得た。そこで当会の集まりのあと有志 8 名で見学に向った。写真右端が木村さんのお父さんで木村宗得氏である。『彼は窯元六姓の分家に大正 9 年に生まれ、お家芸の細工物を得意としますが、一つの作品に観察の時間の方が制作より長くかけ「にらみの宗得」と言われたある種のこだわりの人物でした。』と木村玉舟氏が懐かしそうに解説・紹介していただいた。陶芸作家からの直接の解説も嬉しいのですが、それよりも身近な親族でもあり息子として乗り越えなければならない芸術家としての玉舟氏の気概に接した一日でした。2010.8.27

山崎泰二 記